報告１・ヨーロッパから東南アジアへの視座

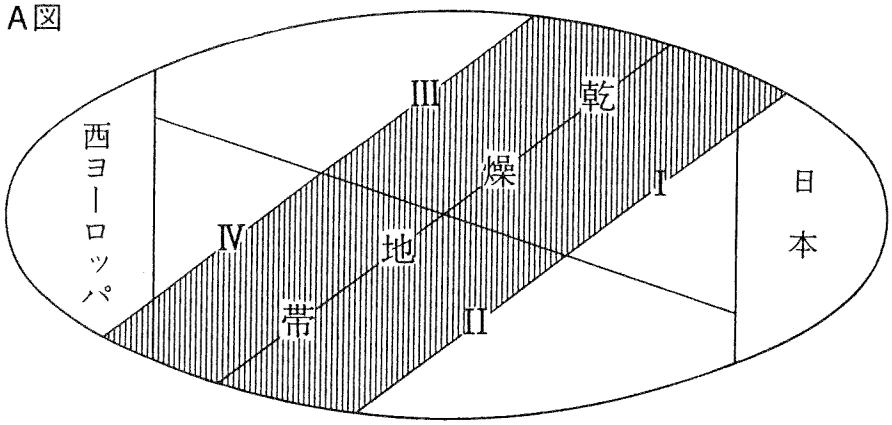
川勝平太

東南アジアをヨーロッパと比較する、ないし両者の地域間関係を論じるということは、地域を世界史のマクロレベルで考えるということである。既成の世界史のマクロ理論としてはマルクスの史的唯物論（唯物史観）があり、これは世界史を奴隷制、封建制、資本主義社会を経て社会主義社会に移行するものとして描こうとした。この研究会のテーマと重なるのは、梅棹さんの「文明の生態史観」のモデルだろう。これをA図に示した。乾燥地帯を囲むようにＩの中国世界、 IIのインド世界、 IIIのロシア世界、IVの地中海世界が示されている。縦線部分の乾燥地帯に対し、白地の地域は農業地帯だが、Ｉの中国は乾燥地帯の匈奴、モンゴルなど遊牧民の破壊的影響を受けながら歴史を循環させてきた。インド世界も同様に乾燥地域からの影響があり、古くはアーリア人の侵入とか、現在ではパキスタンとの緊張関係などが見られる。ロシアの場合、「鶏」と「馬」の戦い、つまりロシア農民とトルコ系遊牧民とのダイナミズムで描かれる。今回のソ連邦の崩壊も史的唯物論では資本主義から社会主義に移行した後に資本主義に戻るということは考えられないが、生態史観にたてば、「鶏」に対して「馬」が盛り返したという観点で論じることができるわけだ。また、IVの地中海世界も農耕世界と遊牧世界のダイナミズムが見て取れる。こうして乾燥地帯は破壊を及ぼす地域であったが、このような暴力的破壊から自由であったのが日本と西ヨーロッパであったという観点から、両地域の近代化が説明されるわけで、明快である。梅棹文明地図Ｂ図はG・H線によって東ヨーロッパと東南アジアが示されている。これらは梅棹さんの独創的仕事であり、ユーラシア世界の中に東南アジアを位置付けた有力なモデルである。大事な点は、西ヨーロッパと日本は、梅棹さんの言葉では「第一地域」に括られている。それは「日本はアジアでない」ということを意味する。この点が梅棹モデルの最も啓発的なところだと思う。

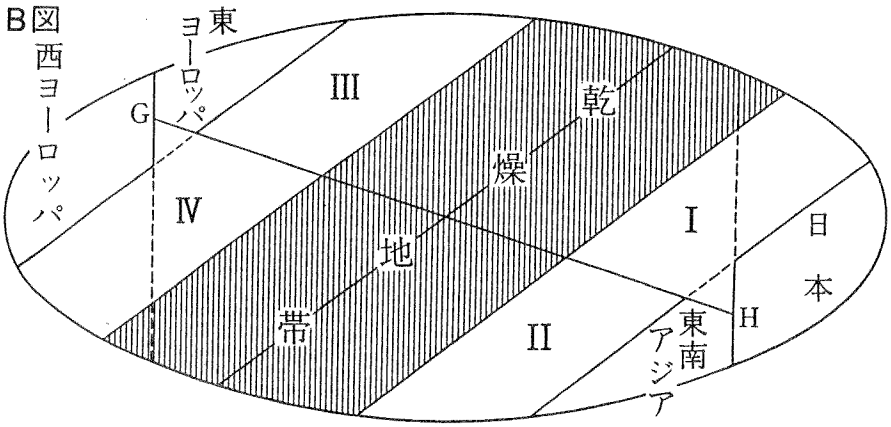
梅棹さんのモデルは生態学を基礎にしているが、同じように生態学を基礎にしてマクロの生態地図を「世界単位」として描かれたのが高谷さんの『新世界秩序をもとめて』（中公新書）、『世界単位から世界を見る』（京都大学学術出版会）だ。図１・世界単位、図２・生態図は後者から引用した。これは高谷さんが「足で見つけた世界単位」である。梅棹さんと高谷さんの

梅棹文明地図

A図

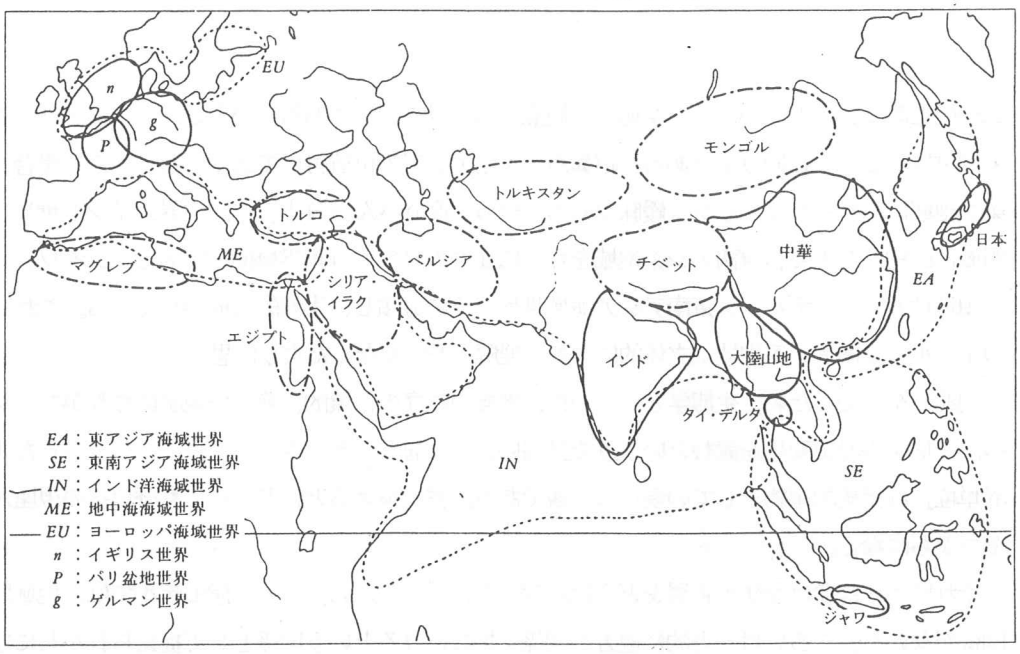


B図



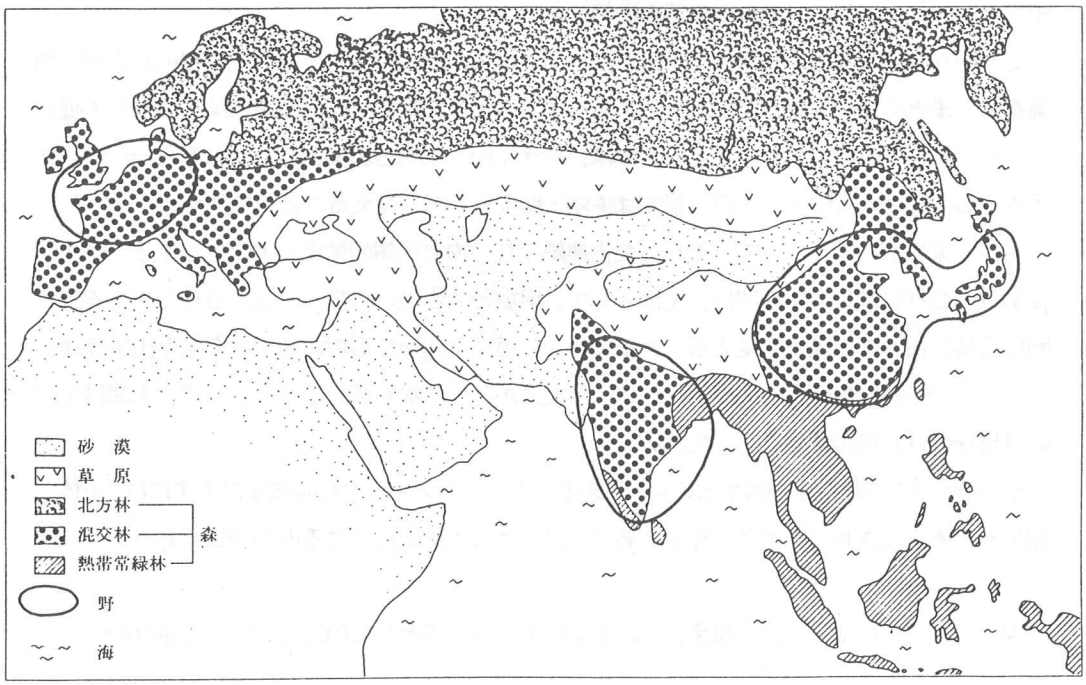
（出典）川勝平太「東アジア経済圏の成立と展開－アジア間競争の五〇〇年」（溝口雄三他編『アジアから考える［6］長期社会変動』東京大学出版会１９９４年Ｐ．５６）

図1　ユーラシアにある代表的な「世界単位」



（出典）高谷好一『「世界単位」から世界を見る』京都大学学術出版会 1996 年　p.13

図2　ユーラシアに見る5つの生態区



（出典）高谷好一『「世界単位」から世界を見る』京都大学学術出版会 1996 年　p.17

二つの生態モデルの共通点は、生態学的観点からの世界理解であるということと、アメリカの位置付けがない、という点である。相異点は東南アジアの位置付けである。梅棹さんの場合、第２地域に入れられているが、曖昧である。他方、高谷さんは日本、中国世界、インド世界と明確に区別した上で、東南アジア地域をさらに４つの異なる「世界単位」である、ジャワ、大陸山地世界、タイデルタ、東南アジア海域世界単位に分類し、実態的に描かれている。これらのモデルで東南アジア地域は立体的になり、理解しやすくなったように思う。

問題点を指摘したい。生態学というのは、地域の秩序の循環的、静態的説明になりがちであって、地域の歴史変化を読むという点では弱いように思う。高谷さんが「足で見つけられた世界単位」は歴史的産物としての現在の景観である。言い換えると、どうしても歴史への視座が落ちがちになる。

それゆえ、課題は歴史の古層をどう読み解くか、である。お二人の生態モデルでは、地域間関係がないか、あるいは一方的に他方が関係を押し付けるという関係として捉えられがちになる。現実の地域間関係は必ずしもリニアではない。非線形的、非循環的で動態的な性質がある。循環的・静態的な生態モデルの呪縛からいかに逃れるか？　あるいは高谷モデルからいかに自由になるか？　これが私の自立の基本姿勢である。

そもそも生態系とは、辞書的な意味では、ある地域の全ての生物とその地域内の非生物的環境をひとまとめにして物質循環とか、エネルギーの流れに注目して機能系、構造系として捉えたものである。すなわち生態系というのは、生きている生物と環境とを二つながら一つのシステムとして捉えたもので、別の言葉では主体・環境系と言い換えることができる。

主体・環境が一体となって、それが食物連鎖なり、物質代謝の循環の中に生息するのが生物である。これに対して、人間は、主体として、環境乃至土地から自由になれる存在である。人間は道具を使って、環境を変えることができる。道具を使って環境からものを産み出す存在、ホモファーベルなのだ。他の生物は主体・環境系が一体になっているのに対して、人間は生物の「棲み分け」の破壊者として現れる。

それゆえ、人間社会を理解するのに、生態モデルのスタティックな制約をはずすには、主体・環境を二極分解させて、主体と環境、あるいは主体と土地とに分けるのが適当であるように思われる。

環境をここでは土地と言い換えたい。土地に対する主体としての人間という枠組みの中で、

人間の土地に対する態度は大きく二つに分けられる。ここでは、所有の観念があるかどうかで区分してみたい。人間社会の中には土地所有に執着する社会と、土地所有という観念を持たなかった社会とがある。土地所有指向という点ではヨーロッパ人、なかんずくイギリス人はその典型であった。地球の陸地面積は１億４千９百４５万平方ｋｍあるが、そのうちヨーロッパは４９４万平方ｋｍ、約３０分の一を占めるにすぎない。１８００年にはその１０倍、３分の一を彼らは手に入れていた。１９世紀末になるとこれが８４％になる。こうした彼らに、土地所有の観念を持たない人々が出会うと一方的に土地を奪われる可能性が高かった。

最近訳が出たジェフリー・パーカーのMillitary Revolution: Millitary Inovation and the Rise of West（邦訳は『長篠の合戦の世界史：ヨーロッパ軍事革命の衝撃』同文館　１９９６年）は、１５世紀から１８世紀にかけて起こったヨーロッパの軍事革命が世界制覇を可能にした、という点を強調している。ヨーロッパ以外に軍事革命を経験した国がある。これが日本である。ところが、どうしてかわからないと書いてある。彼にとって日本はまさに謎であった。さて、所有に関連して、様々な事例が紹介されているが、ひとつはアメリカ、サハラ以南のアフリカ、東南アジア島嶼とヨーロッパが接した場合、ある決定的な同じ経験をしているというのだ。これらの地域では、戦争は奴隷の労働力を得るために行われた。例えば、１６０３年から１６０６年にジャワに暮らしたエドモンド・スコットは「ジャワ人の富は奴隷に依存している」と記した。だから、奴隷が殺されると物乞いをしなければならなくなる。戦争は領土を獲得する為のものではなく、人の確保、労働力確保を目的としていた。しかし、パーカーによれば、ヨーロッパでは奴隷を得る為に戦争をしたことは一度とない。彼らは土地を自分のものにする為に戦争をおこなうという独特の戦争の仕方をしたわけだ。

ヨーロッパがいわゆる「地理上の発見期」に世界各地に進出するが、その記録の中で最も精彩があるのが、ラテンアメリカの場合である。その中でラスカサス（１４７４年~１５６６年）というスペインの神父の記録は特筆すべきものがある。彼は6回ほど大西洋を渡り、スペイン人の横暴に対して警告を発した人物で、コロンブスの航海誌もまとめている（岩波文庫）。著名な著作として『インディオスの破壊についての簡潔な報告』（岩波文庫）というのがある。この中で、インディオは財産を所有しない、所有しようとも思っていない、と書くわけである。そのことに彼は非常な驚きを持った。また、同時期に、繁栄を誇っていたマラッカの最後のムスリムの支配者について次のようなアルブケルケの叙述がある。すなわち、１５１１年のポル

トガル人の来航・侵入に対し、スルタンとその兵達はしばらく抵抗したが、ポルトガルがなかなか撤退しないのを見て、内陸に一日エクスカーションに出た。アブルケルケの覚書によると、ムスリム支配者はポルトガルが略奪を終えると立ち去るものと思っていたようである。しかし、ポルトガルは居残って強力な砦を築いた。これもヨーロッパ人の土地にたいする強い執着を示したものといえよう。

さらに、イギリス人の１８世紀における行動様式を典型的に描いているといわれている「ロビンソンクルーソーの物語」も土地への執着を強く印象付ける。クルーソーの漂着した島のモデルは、推定されるところによるとカリブの南端に位置し、オリノコ川の河口数十キロにあるトバコ島のようである。ロビンソンクルーソーの一連の行動に見られるイギリス人の行動様式について、故大塚久雄先生は次のように述べられている―「ロビンソンクルーソーは住居を作る。住居の回りを木立で囲む。その住居につなげて仕事場を設ける。そこでヤギの皮、その他を使って、衣服など日常品を作る。さらに、住居の為の囲い込み地のほかにも柵で幾つかの土地を囲い込む。囲い込み地は小麦畑にする。船で見つけてきた小麦を播き、収穫は一部は種子として残して、後は消費にあてる。また、別の囲い込み地を牧場にし、そこで捕らえてきたヤギを増殖させて、必要に応じて屠殺する。その肉を自分で作った陶器の鍋でシチューにして舌鼓を打ち、その皮は衣服、日傘などに利用する」。大塚先生は「ロビンソンクルーソーはこういうふうに土地を囲い込んで、自分はこの囲い込み地のマスターだと宣言する」とまとめられている。このようにクルーソーの行動様式は土地所有指向型であるという点が良く示されている。これは、アフリカ、東南アジア、ラテンアメリカの人々の土地に対する対処の仕方と随分違う。

また、東アジアの土地に対する考え方とも違う。例えば、四書の『大学』に次のような一節がある。「君子は徳を積む。徳あれば人があり。人あれば土があり。土あれば財あり。財あれば用あり。」つまり、徳が元で、財が末である。財を産むのは土地ではなく人である、という考え方である。人に基づいてものを見ている。土地の排他的私有という考え方は、無論マルクスが重要視したのだが、近代日本の理解においても、大変重要な意味を持った。つまり、これが資本主義発達の基礎であり、明治維新の際の地租改正でこれが認められた、ということを以って日本が近代社会になったとする見方がある。近代社会では、土地所有権の確立がメルクマールにされている。

しかし、近年では、例えばマックファーレンの『イギリス個人主義の起源』（リブロポート）の中では、土地の排他的私有というのは近代化の基礎というよりは英国特有の慣習というべきものという理解が示されている。つまり、近代以前、史料が発見される限り遡ってみても、イギリスでは土地が個人によって排他的に所有されている。イギリス人は土地を排他的に個人が所有するということが、自由の、彼らが言うところの「個人主義」の保証だと信じていた。そういう思想、イデオロギー、思い込みに結び付いて存続して来た土地私有制を近代化の基礎にすえた、といえるかもしれない。ともあれ、これは特殊な考え方であり、制度であった。

では、なぜイギリスを典型にヨーロッパでは土地私有、土地所有への指向が強いのか？一つはおそらく、農業生産力が低い点があげられよう。三圃制に見られるように、農地の一部分を休耕地にせねばならない。また、中世では麦の seed/yield ratio が１対２、つまり一粒の種から得られる収穫がその２倍にしかならなかった。収穫の半分は翌年の種に残しておかねばならなかったわけである。他方、江戸時代の日本ではその収穫が５０倍ないし１００倍に達していた。同時期のヨーロッパでは２ー４倍であった。いかに土地が貧しかったかが良くわかろうというものである。これは、ヨーロッパ人の世界への拡大の原動力に大きく関係していそうである。例えば、イマニュエル・ウォーラーステインも『近代世界システム』（岩波書店）で、ヨーロッパ人が当時何よりも食糧をもとめて地理的拡大を求めた、と数ページにわたって力説している。結果的に、旧世界と新世界とが繋がって、作物と家畜が相互に伝播した。これが、人類史上最大の出来事のひとつであり、地理上の発見がもたらしたものの中で最も意味が大きい。つまり、新世界の作物がなければ、後のヨーロッパの人口増加は実現しなかっただろうし、ヨーロッパの家畜、輸送・耕作用の馬・ロバがなかったらあれほど短期間に新世界は開発されなかっただろう、というわけである。他方で、ヨーロッパが、なぜ軍事的な指向を一方で持ったのか？という点についても次のような見方がある。例えば、ヨーロッパにおける軍人の数が、１７世紀において１０００万から１２００万人にのぼっているとされている。その入隊の最大の動機が、生活の困窮と貧困であった。軍隊は飢えに苦しんだ貧困層に命をつなぐ最後の藁のひとつを提供した。当時の軍事支出は１７００年代のルイ１４世の場合歳入の７割５分、ロシアの場合ピョートル大帝は８割５分、１６５０年代のイングランドの場合国家歳出の９割が陸海軍費にあてられていた。軍事力によって、他国の土地・財産を奪うという手法であった様だ。

大まかに言えば、ヨーロッパは土地生産力が低く、食糧が不足し、飢えが常態であった。こ

れに対して、彼らが出た行った先の地域について、たとえばラス・カサス神父は、スペイン人のインディオ虐待の記述の他に、次のように記していた。エスパニョウラ（現在のハイチ、ドミニカ）は非常に豊かな島であり、あるいはマグア王国では沃野が南北に縦断し、延々８０レグアも続いているのでこの世の最も素晴らしいもののひとつである。また、マリエン王国に対して、この王国はポルトガル王国よりもはるかに大きく、ずっと豊穣でキリスト教徒達が植民するのにふさわしいところであった。またマグアナ王国について他の王国同様暮らしやすい所で、また豊穣で素晴らしい土地であり、スペイン人達はサンフワン（現在のプエルトリコ）とジャマイカへ侵入したが、このふたつの島はまるで実り豊かな果樹園のような所である。このように土地の豊穣に目を見張っているわけである。ヨーロッパのように土地の生産力が低く、食糧不足が常態で、だからこそ土地に執着するという地域と、他方、ラテンアメリカのように、土地が肥沃で、豊穣で、食糧が有り余るほどある、したがって土地に執着しない地域があった、ということになる。

こうしてみてくると、土地が産む物が豊穣かどうかがポイントである。言い換えると、結局、土地に対する異なった態度から導き出されるのは、人間と土地との間に介在する物の重要性である。この点への着目が生態の呪縛から逃れる一つの視点になるだろう。

最後に見方の問題に言及しておきたい。高谷さんの景観学的手法を参考にすれば、例えば、高谷さんは景観としてジャワの火山や大陸の山地などを指しておられるが、私は生活景観に着目するというふうに限定してみたい。それは、海田さんがかつて「米・魚・家禽・果樹複合」ーこれが典型的な東南アジアの一つの典型的な生活景観である、と指摘された視点と通じるものがある。このように地域の生活景観を物の複合として描くことができそうである。こういう物産複合（product complex）を通じて地域単位を見る。つまり、人間と環境の中間領域にある物のをまとまりとして、コンプレックス、複合体として地域単位の指標とするのである。地域社会の生活を支えるものの全体を生活景観として捉えようとする立場である。人類学で言われる文化複合 culture complex の中から、目に見え、手に触ることのできる tangible な物だけを捉える。これはマルクス的な用語で言えば使用価値の体系、渡辺尚さんの言葉で言えば商品体系といえよう。物を指標にして地域を見るという視点だ。

物に着目するといったが、物は人間が使う物であるから変化する。人間の一生においても幼い子供から老年になる間に、使う物は変化する。社会の中でも使われる物は歴史的に変化する。

社会の物産複合の変化の原因のひとつは、地域間関係が結ばれることにあると考える。梅棹さんの生態史観における社会変容は、暴力が社会を変える、という理解であった。暴力によって社会を変えられなかったので、日本社会と西ヨーロッパ社会がサクセッション（遷移）を遂げて、成熟して近代社会になるという理解である。他方、史的唯物論では、人間の労働の生産力が高くなると社会が変わる、という見方をとっている。これらに対し、物産複合という見方にたてば、未知の物が外からもたらされ、それが既存の物産複合の中に継続的にもたらされると、生活用品が変わり、暮らしの立て方が変わる。生活様式は文化であるが、それは目にみえる生活景観であり、物産複合が変わると、徐々にせよ、急激にせよ文化も変容する。生態史観は暴力、唯物史観は生産力を社会変容の主因と見るのに対して、物産複合の変容をもって社会あるいは地域・文化の変化を見るという視点を強調しておきたい。とくに物産複合の変容が、外からもたらされる物によって起こるという点を強調すれば、海から見る、という視点が極めて重要になってくる。物産複合の変容は、新物産の導入ということでかなり説明がつくのである。これが、プラスに働けばdevelopment（発展）をもたらし、マイナスに働けば、つまり収奪されれば、under-development（低開発）に陥ることにもなろう。たとえば、東南アジアではサゴヤシが導入されて以降、一本のサゴヤシから炭水化物が３００ないし４００キログラム取れるようになった。この処理に２週間要すれば可能であった。これは生産力の発展というよりは、サゴヤシそれ自体がもたらした食文化の変化である。日本の場合でも、米の導入により、土器が変わり、生活様式までが変わり、縄文時代から弥生時代に移行していった。あるいは、角山さんがかつて指摘されたように、たとえば茶がアジアからもたらされ、それがイギリスのティー文化になった。イギリス社会はティー文化を抜きにしては考えられないが、ティーはイギリスが固有に生産力の発展で生み出したものではなく、アジアから、つまりは海からもたらされたものである。こういう見方に立つわけである。

さて、東南アジアとヨーロッパとの関係であるが、ヨーロッパの歴史的転換に、東方からのインパクトがある。一言で言えば、近代ヨーロッパの淵源が東南アジアである。長期的にみると、東方からのインパクトがあって、それから自立するという形で、ヨーロッパに古代、中世、近代という歴史的画期が生まれたとみることができる。まず、古代、チグリス・ユーフラテスに生まれて、エジプトを媒介にして、ギリシャ・ローマに来て、発展していくヨーロッパの歴史を考える。ギリシャにおいて古典古代が開花するわけであるが、ヨーロッパにおける「歴史

の誕生」はヘロドトスの『歴史』によるとされる。ヘロドトス『歴史』（岩波文庫）はペルシャ戦争を頂点とするペルシャとギリシャの東西抗争を話の軸にして、アテネがペルシャを打ち破る過程とその余波を描いている。それはペルシャ内外の事情を伝える説話をふんだんに織り混ぜて描いている。ほとんどオリエント史とさえとれる内容である。しかし、その叙述はオリエントの大陸世界とはっきり異なる海洋世界アテネを結果的に浮き彫りにしているのだ。『歴史』の最後を飾るペルシャ戦争、すなわちサラミスの海戦をヘロドトスはこう書いている。「この激戦で、ダレイオスの子で、クセルクセスの弟にあたる司令官アリアディグネスを始め、ペルシャ、メディア及びその他の同盟諸国の名のある人士が多数戦死した。ギリシャ側にも若干の死者があったが、その数は少数であった。ギリシャ人は泳ぎの心得があったので、船は破壊されても敵と刃を交えて戦死せぬ限りサラミス島へ泳ぎついた。しかし、ペルシャ兵の多くは泳ぎのできぬ為に海中で落命。前線の艦隊が逃亡を始めるにいたってペルシャ艦隊の大半は絶滅の憂き目にあった。とういうのは後方に配置されていた部隊は自分達も大いに手柄を示さんものと船を前方に進めようとあせって逃げようとする味方の艦船に衝突したからだ」と。こういう叙述からギリシャ人は泳ぎのできる海洋民で、ペルシャ人は泳げない陸地民だ、ということがわかるだろう。同時に、海洋民の活躍した海洋の舞台、これが地中海であり、ギリシャ王がフェニキア王の娘エウロペをかすめとって以来、その名を受け継いできたヨーロッパが海洋の真っ只中、すなわち地中海で誕生した。東方の圧力を跳ね返すことによって誕生し、最初のアイデンティティが作られている。

それでは、古代がどうして崩壊したか？　ピレンヌによれば、今までは北方の蛮族によってローマが破壊されたとされていたが、そうではなく、南方、東方から襲った外圧が古代と中世の間に決定的な断絶をもたらした。外圧とは何かというと、東方の勢力、すなわちイスラームの勢力で、地中海は古代にあっては「ローマの湖」であったが、イスラーム勢力の西漸によって「イスラームの湖」になり、ヨーロッパがそこから締め出された。イスラムの進撃をようやく押し止めたのが７３２年のトゥール・ポワチエの戦いであった。両者はピレネーの山脈をはさんで対峙した。ヨーロッパは陸地に封じ込められた。そのことによってかえって、イスラーム世界とは違うキリスト教を支柱とする文化的統一体としてのヨーロッパが成立した。イスラームなくしてヨーロッパなし、マホメットなくしてシャルル・マーニュなし、というわけなのである。シャルル・マーニュのフランク帝国というのは、異論もあるが、基本的には9～１１世

紀まで封鎖状態におかれた内陸国家であった。必然的に、土地しかも極めて貧しい土地が唯一の富の源泉となる経済秩序、すなわち封建制を生み出さざるをえなかった。それが中世だ。

それでは、近代がどうして生まれたかというと、この東方の圧力をひっくり返すということになる。すなわち、ベルギーと北イタリアが結ばれ、ヴェネチアが勃興し、これが東ローマとの貿易に積極的に乗り出して、そしてジェノヴァを破り、そしてイスラーム勢力下にある東地中海の貿易を独占するにいたる。ヴェネチアを核としてヨーロッパが再び地中海に乗り出し、地中海がイスラームとヨーロッパの競合する海になった。その帰結は、１５７１年におけるレパントの海戦である。この海戦を長い叙述の最後においたのが、ブローデルの『地中海』である。そのクライマックスを彼は次のように描いている。「レパントの海戦が始まったのは１５７１年１０月７日二つの艦隊は互いに相手を探しあい、１０月７日未明レパント湾の入り口で出し抜けに出会った。対峙するキリスト教徒とイスラーム教徒、この時どちらも驚きの色に染め上げられながら相手の兵力を数えた。トルコ側戦艦２３０隻、キリスト教国側２０８隻。キリスト教国側は大勝利をおさめた。難を逃れたトルコのガレー船はほんの３０隻。この衝突でトルコ側は３万人以上の死傷者、３０００人の捕虜を出した。ガレー船の漕ぎ手として働いていた１５０００人が解放された。キリスト教徒側は１０隻のガレー船を失い、死者８０００人、負傷者２１０００人。この成功には人的な代価がつき、戦闘員の半数以上が戦闘不能の状態に陥った。戦場と化した海は戦っている人々には突如、人間の赤い血のように見えた。この時、キリスト教世界の現実的な劣等感に終止符が打たれて、現実的なトルコの優位が終わりを告げた。」このように血の海と化した戦闘を克明に叙述しながら、ブローデルはレパントの海戦を機に歴史の磁場が地中海から大西洋に移る、すなわち中世から近代に移るという転換を描いている。この点は永沼さんの御専門であるがジェノバがポルトガルを足場にして世界に出かけていく時期であった。中世から近代への転換が東方との関連で書かれていた。

近世になると舞台は地中海ではなく、西の大西洋になった。これはクリスチャンの海であった。東は東地中海をそのまま延長したインド洋になり、その東の端が東南アジアである。すでにレパントの海戦の時期この海域はイスラーム勢力下にあり、環インド洋圏はそのままイスラームの海であったと言える。それが丁度大西洋がキリスト教の海であるということと対比的にイメージできよう。それまで、西地中海ないしは北西地中海がキリスト教の海、東南地中海がイスラーム教の世界であり、両者が拮抗していた。この拮抗関係の相似形として、大西洋はク

リスチャンの海、インド洋イスラームの海という風に拡大したのである。当時の用語でヨーロッパ人は大西洋世界は West Indies（西インド）、インド洋世界のことを East Indies（東インド）と呼んだ。西インド貿易と東インド貿易の両者をどう掌中におさめるか、ということがヨーロッパ勢力の課題であった。西インドに拠点を持つヨーロッパは、東インドに拠点を持つイスラームと対峙したのだ。そこには海洋の支配をめぐるヨーロッパの勢力とイスラームの勢力との中世以来の拮抗するベクトルが見て取れる。その帰結として、最終的に１９世紀末にインドからイスラーム勢力を追い払うに至った。これはまさに中世末にイベリア半島からイスラーム勢力を追い払って、地中海の覇権を確立して大西洋に出たように、インド洋世界におけるインド亜大陸の、そして最後の巨大イスラーム帝国であり、イギリスが足場を固めたムガール帝国を滅ぼし、インド亜大陸からイスラーム勢力を駆逐したのである。このようにヨーロッパの場合、古代の成立に対してはヘロドトス・テーゼ、中世の成立についてはピレンヌ・テーゼ、近世の成立についてはブローデル・テーゼなど、これらいずれの画期においても海の役割が決定的であった。同時に、クリスチャンの世界とイスラームの世界を二つながら一つとして、海域支配をめぐるダイナミックな一つの文明空間として見なければならないという考えている。

ちなみに、イスラーム世界から比較的自由であった空間が東アジアだ。そこは独自の文明空間だという図が見えてくる。東アジア世界とイスラーム世界の中間にある東南アジア世界は一種重要な境界に位置していた。

結局、海洋史観から見た場合、ヨーロッパ史の時代の画期には東方から圧力があった。東方の圧力の源泉・震源からヨーロッパ史を読み返すことができる。その震源地はどこかということが問題となる。図３は、ヨーロッパがどのように出ていったかということを物の動きから示している。新大陸から銀を奪い、欧州でその銀が一部使われて、これは戦争にかなり使われたが、残り３分の１ぐらいが東方に流れ出た。そして、東方から胡椒、香辛料が持ってこられた。そしてこれが欧州で売られ、銀を得る為に自分達が植民した所に、自らの製造品である毛織物を供給していたのである。これを東方からの観点から見ると、かつて中東を媒介にしてイスラームがインドへ銀を持っていき、インドで木綿を買い、これを東南アジアの香料諸島などで販売した。同時に、その見返りとして彼らが手に入れたのは胡椒・香辛料であった。これらはインド・中東をへて欧州にもたらされた（図４参照）。やがて、図４の中東の役割を、アフリカの南端をまわる海上ルートで、欧州が代替した（図５・図６参照）。ポイントは香辛料がヨー

図3

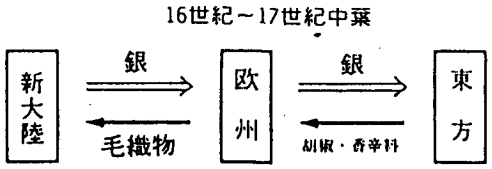


図4

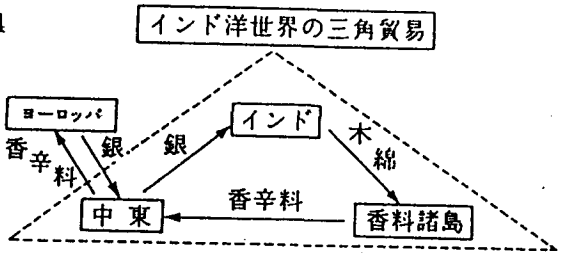


図5

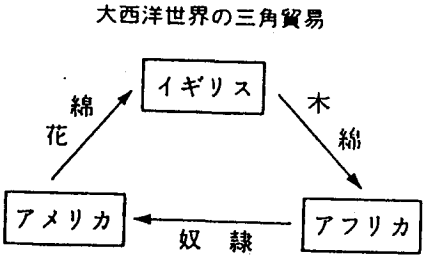
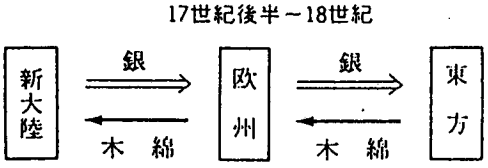


図6



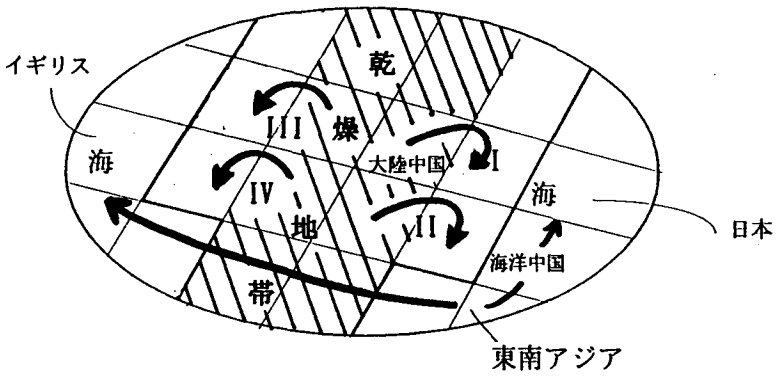
（出典）川勝平太「イギリス産業革命とインドーインド木綿の西方伝播ー」（川勝平太・鈴木健夫他編『「最初の工業国家」をみる目』早稲田大学出版部　P．１７９－２２１）図３・P.202　図４・P.186　図５・P.209　図６・P.202よりそれぞれ引用。

ロッパ社会を変える新しい物産になったということであり、地域社会変容のベクトルは、東方からの商品圧力として、西に向かって働いているということだ。

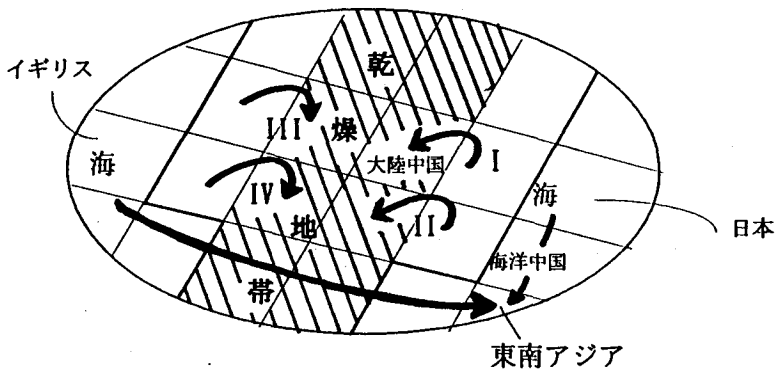
東南アジアからは、当初は胡椒、香辛料であったわけだが、なぜ香辛料であったのか、という点は陸地史観との関連で説明しなければならない。モンゴル帝国が１２－１３世紀に世界最大の陸地帝国を作り上げ、その周辺に日本と欧州が位置した。モンゴル支配の影響は、ユーラシア世界を大きくひとつにまとめ、いろいろなものを結び付けたと同時に、病原菌なども運んだという点があげられる。疫病で世界を結び付けたのである。ヨーロッパでは、人口を３分の２に減少させるペストの流行となって現れた。そして、これを予防し治療する薬として、胡椒、香辛料が求められた。後にこれが薬味・調味料になるが、これは１７世紀以降で、それ以前は薬であった。それゆえ、生死にかえても、あるいは高価でも取りに行かざるを得なかった。これが、東南アジアのスパイス・アイランドにヨーロッパ人が出かけていった大きな動機だ。同時に中国人を含むありとあらゆる人々が東南アジアに来ていた。東南アジアにいろんなものが入っていった。その図が図７・海洋史観のためのモデル図（1）である。東南アジアから海洋中国を経て日本へ物が流れ、また、地中海を経て、あるいはインド洋一希望峰をまわってヨーロッパに様々なものが流れた。近代以前に東南アジアから日本並びに欧州に動いていった物は多様であったが、この中で決定的に大きな影響を与えたのが木綿だ。１７世紀後半から１８世紀にかけての東方からの代表的商品圧力だ。これが継続的にもたらされることによって、ヨーロッパの生活様式、文化複合が変容を遂げた。東方から木綿がもたらされ、その見返りに新大陸から一方的に銀が東方にもたらされ、そのうち大西洋の三角貿易、つまりイギリスがインドの木綿をアフリカに運び、アフリカから新大陸に奴隷を運び、新大陸から金、銀を欧州へ持ち運ぶという貿易構造が出来上がった。その後、イギリスの木綿がインドの木綿に代替し、アフリカ奴隷を新大陸に運び、新大陸の綿花を原料とした。１７世紀から１８世紀にかけてイギリスでは自分達で木綿を作るようになっていく。東方の商品圧力を揆ね返すという形で、１９世紀にイギリスはいわゆる「世界の工場」にのしあがった。イギリスで作られる木綿が東南アジアへも流れた。これを図８に示した。また、図９はイギリスの木綿が入っていったのが混合型の地域つまり、東は東南アジアまでであったということを示している。つまり、かつて東方から流れていった物産（混合型木綿）が今や西方から、つまりヨーロッパから流れてくるという事態になった。

図7　海洋史観のためのモデル図

海洋史観のためのモデル図（1）：近代以前

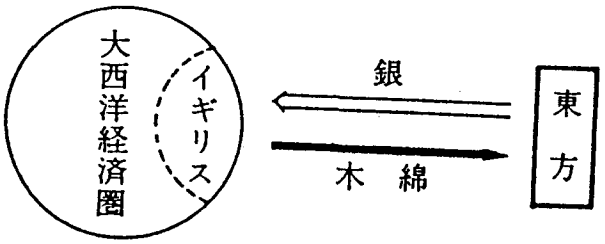


海洋史観のためのモデル図（2）：近代以後



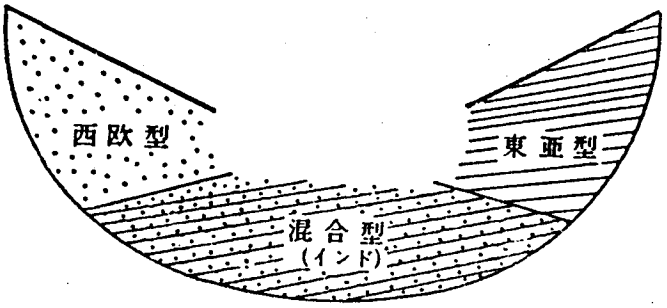
I中国世界　IIインド世界　IIIロシア世界　IV地中海・イスラム世界
日本とヨーロッパが近代以降に影響力を行使したアジアの海は、近代以前に影響を受けたアジア海域、すなわちヨーロッパはインド洋、日本はシナ海である。矢印は影響力の働く方向。

図8　　19世紀



(出典) 川勝平太「イギリス産業革命とインドーインド木綿の西方伝播ー」(川勝平太・鈴木健夫他編『「最初の工業国家」をみる目』早稲田大学出版部　P．１７９－２２１) P.202 より引用。

図9 十九世紀末のユーラシアにおける木綿市場圏の三類型



東亜型〔短繊維綿花ー太糸ー厚地布〕
西欧型〔長繊維綿花ー細糸ー薄地布〕

(出典) 川勝平太「日本産業革命のアジア史的位置ー綿業を事例とした覚え書きー」『早稲田政治経済学雑誌』第297・298合併号　P.202

東南アジアから見た場合の歴史像について考えてみよう。それは南シナ海域時代、扶南時代、シュリーヴィジャヤ時代、三仏斉時代、マラッカ時代と変わっていった。１５世紀から１６世紀のマラッカが中心となってそれ以前のイスラームの東南アジアへの進出と中国の東南アジアへの進出によって栄えた東アジア、東南アジア世界がある。これをプロト世界経済、ないしプロト自由貿易の世界といっておこう。これにヨーロッパ人が出くわした。貿易品の流れで見ると、銀が東南アジアに流れ、物産が西に流れた。ヨーロッパにとってのこうしたいわば外圧に対するレスポンスとして出てくるのが、最終的にはいわゆる産業革命だ。こういう物産が豊富でいろいろな物が交易されている世界、こいわばケイオティックなあるいは複雑系のプロト世界経済、または世界経済の原型であった。これを意図的に秩序ある合理的な世界経済に作り上げていったのがヨーロッパの大西洋世界経済といわれるものである。これを実現させるのに、生産指向型の原理を生みだした。つまり、かつて買っていたものを自ら作り上げていくという姿勢だ。生産志向というのが、ヨーロッパが東南アジアからの外圧に対してなしたレスポンドの実体だ。１９１４年には、環インド洋圏のほぼ全てが、ヨーロッパの植民地になった。

興味深いのは東アジア地域はヨーロッパ諸国の植民地にならなかったという点である。ヨーロッパはかつてそこからものを買っていた地域、あるいは影響を受けていた環インド洋圏地域を植民地にした。１９１０年には全世界の８４％を植民地にしていた。その大半はアメリカ、アフリカ、環インド洋圏にあった。東南アジアは１６世紀から１７世紀にかけて、ここでいうプロト世界経済、プロト自由貿易の時代であった。あるいはアンソニー・リードの表現を借りれば、the age of commerce と呼ばれる商業の時代だったのである。この時期は未曾有の交易の時代であった。むしろこれが基盤になって、それを作り替えた形の一つがヨーロッパの近代世界システムであったといえる。もう一つ作り替えた形が日本だ。ヨーロッパの世界経済を生み出したのは、自生的なヨーロッパの外延的拡大ではなく、外からのインパクトに対するレスポンスとしてヨーロッパという構図が出てくる。そのレスポンスの行き着く先が東南アジア地域の植民地化だ。東南アジアは近代の出発点であり、かつ終着点であったといえよう。

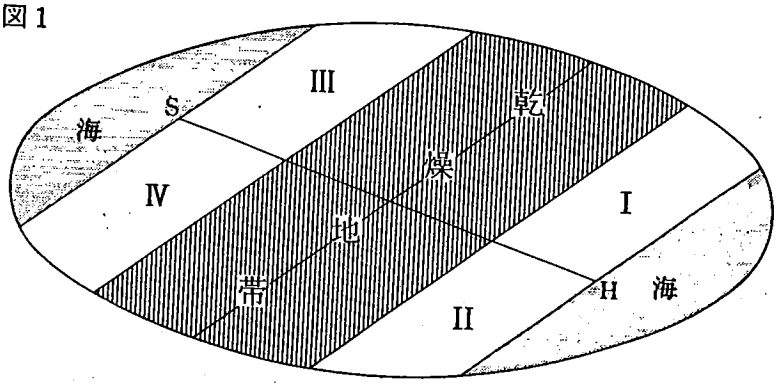
東南アジア地域には１６世紀になってヨーロッパ勢力が入り込んで来たが、それ以前からイスラーム、ヒンドゥー、中国、日本の各勢力が入り込んでいた。あらゆる人々がここに赴いており、さらに其々が東南アジアと二者間関係を持った。その意味では、東南アジアはそれぞれの地域を映す鏡であったとも言えよう。そういう地域が今度は低い労働コストを逆手にとって、

現在経済発展しつつある。東南アジア地域としてまとまっているというよりは、中国的な世界、マレー的な世界などいろいろな世界として連合を作っている。ある種の世界単位に収斂するというよりは、それぞれが多様化、分化を遂げている世界である。世界転移が今後どうなっていくか実験しているかのようにもみえる。高谷さんが言われた自然生態によって作られる世界単位というよりもむしろ、いろいろなものを取り込んでその中で分化をし、多様になっていく、そして統一を作り上げるようなイメージがある。むしろ、太平洋文明、あるいは西太平洋世界というようなものを考えたほうが良いのではないか。アジア大陸に引き付けて考えるというよりもオセアニア、メラネシア、ポリネシアなどに広がる世界として、アジアというよりも脱アジア的な別の文明圏を形作っていると考えることができよう。

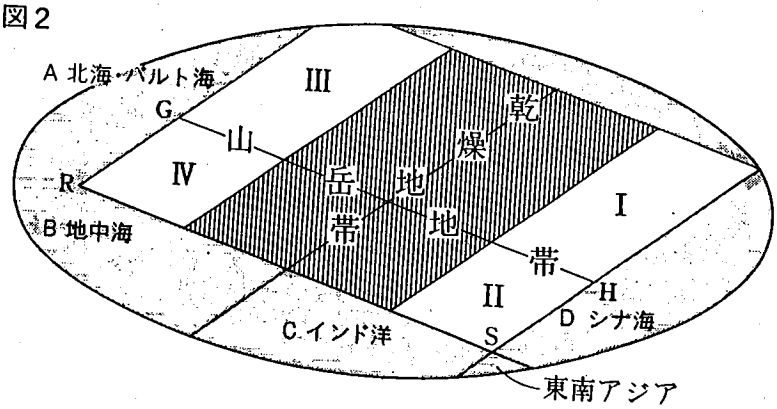
ここで、高谷さんの図を参照していただきたい。図１の「世界単位」は京都大学学術出版会の著作から引用している。この図は中公新書の図とはひだ入り側の位置付けの名前が異なっており、少々わかりにくいところもあるが、大変興味深い見取り図である。IN:インド洋海域世界、MS:地中海海域世界、EU:ヨーロッパ海域世界、EA:東アジア海域世界、SE:東南アジア海域世界という風に整理されている。図１０に示した私の修正図２と対比させれば、シナ海が EA にあたり、インド洋が IN、地中海が ME となる。北海・バルト海と書いたのは梅棹さんのモデルをもとにしている。この海域関係において、働いているベクトルは SE から IN、ME に最初向かっていた。それが反転してかえってきたというのが、今日の話のポイントである。もう一つ SE から EA の方向に向かうベクトルがある。これが反転してかえってくるのが１９世紀後半から２０世紀にかけての世界である。SE はバトルフィールド（戦場）になった。それが第二次世界大戦だ。こういうベクトルの反転状況は、ベクトルの回帰現象と呼べる。２０世紀のほとんどを通じてこの地域は随分と痛めつけられたが、現在ここは不死鳥のようによみがえりつつあり、同時に、仏教、イスラームなどの文化、宗教的要素を含めありとあらゆる多様な要素がこの中に包みこまれている。その多様なるものは、この世界の実相を映している。東南アジアにおける関係は二者関係といわれるが、それらが複雑に絡み合って、中心なき中心のような世界として東南アジア地域が浮上しつつある。これはベクトルとしては西から SE にかえってきているので、そのまま太平洋の方向に動いていると言えよう。こうして、海の視点でいうと、ヨーロッパでは「西地中海・東地中海」のベクトルの拮抗、それらが西・東に拡大されて「大西洋・インド洋」における拮抗があった。しかしこれから次の時代は、太平洋の文明の時代に

図１０　修正図

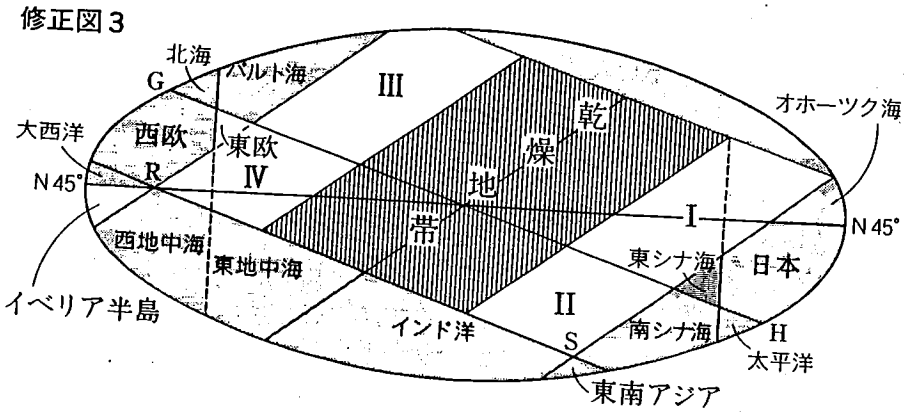
修正図１



修正図２



修正図３



（出典）川勝平太「東アジア経済圏の成立と展開－アジア間競争の五〇〇年」（溝口雄三他編『アジアから考える［6］長期社会変動』東京大学出版会１９９４年Ｐ．５７）

なっていくと予想される。事実１９８９年にはAPECが形成され、その中核になっているのが、アセアン７ヶ国である。やがてカンボジア、ラオスも加盟していく。これが太平洋文明というものの一つの担い手になっていくに違いない。ありがとうございました。

質疑応答

渡辺尚　海域世界、あるいは海洋史観というものが鍵概念であったと思われるが、陸対海という二項対立という図式で物事を斬っておられた。実はわたしはヨーロッパの河にかなり関心を持っている。河は陸の範疇なのか、海の範疇なのか、どうなのであろうか？というのも、私はライン河[1]のことを研究しているが、ライン河航行の自由化と水運技術の発展とによって、バーゼルまで巨大な船が入れるようになった。この事で、スイスが北海沿岸地域になったと理解している。北海がアルプスの麓まで入り込んできたのである。ヨーロッパの大陸を研究していると、河というものを無視できない。それで、河の範疇は海、陸のどちらだろうか、という疑問を感じた。

川勝平太　私は海に入れている。船を造るには森がなくてはならない。森は山にあり、川を通じて切り出してくる。

家島彦一　言うまでもなく、東南アジアでも同じく川は極めて重要である。東南アジアはもっぱら内陸との関りは川が仲介となっている。川は国家の形成とか商品集散や運搬などでは中心的な役割を果たしている。中東地域ではエジプトのナイル川、イラクのチィグリス・ユーフラテス川など、大きな河川は限られているが、その役割は大きい。

応地利明　川勝さんのお話で、レパントの海戦に触れられた。海の歴史から言えば、東西両地中海がインド洋、大西洋へ其々拡大するという点を強調された。それともう一面、これは後の陣内さんのお話と関連するのだが、ヴェネチア、あるいはジェノヴァなどの海域都市国家的なものからオスマントルコやイスパニャなどの陸地国家、あるいは領土国家へと大きく転換する過程があったのではないかと考える。そういう側面はどうであろうか？ただし、オスマントルコみたいな領域国家が勝利をおさめていると言えるのでは？ヴェネチアやジェノヴァに対して。海域国家から大陸国家へと移るという側面もあ

[1] 国際河川であるライン、ドーナウ両河の本流をあえて河と表記し、それぞれの支流、二次支流を川と表記する理由については、渡辺尚「ラインーマインードーナウ諸契約」（『経済論叢別冊　調査と研究（京都大学）』第９号、１９９５年１０月）参照のこと。

ると言えるように思う。

川勝　ジェノヴァがポルトガルに投資をして出ていく。しかし、やがてポルトガル、スペインがジェノヴァ以上に自らの力で外に向かうことになる。

応地　ジェノヴァを中心としたユダヤ人のネットワークがポルトガル、スペインにも入り込むという大きな議論があるが、これら両国は海洋国家とどこか違った国力の源泉があったのではないか。

永沼　その点はヨーロッパにおける近代をどう捉えるかという点、すなわち国民国家の形成と近代の成立との関係をどう捉えるかということに関っている。都市国家的な国家、領域国家的な国家と、帝国的な国家を同列に置いて海洋国家か陸地国家かを論じることはできないのではないか。

家島　１５~１６世紀という時代をシンクロニックに見ると、中国では明朝から清朝、インドではムガール帝国、イランではサファヴィー朝、中東・東欧ではオスマン帝国、西ヨーロッパではハプスブルク帝国など、いわゆる陸の大帝国が並び立つ時代であった。つまり、陸の大帝国は陸の領土を拡大し、四方に国境を定めた。しかし、海に対する支配の観念は、陸ほど強くなかった。続く時代、つまり近代は海中心の時代となった。そこに大きな時代の変化が読み取れるのである。

渡辺　その問題と関わって、ヨーロッパ内部の話だが、産業革命期以降、陸指向と海指向という二つのベクトルが同時平行的に出てきている。ナポレオンが１８０６年に大陸制度（システム・コンティナンタル）というのを打ちだすが、これでフランス大帝国を作っていこうとする。これは崩壊したが、現在にいたるまでフランスがヨーロッパ大陸の中心であるという意識は捨てていない。これがEU統合の一つの原理になっている。確かに、フランスは海外植民地を持ったが、イギリスと比較すれば、フランスのベクトルは相対的にヨーロッパ大陸の周辺に向かっていくというものであった。全体としてみれば、いわば主がイギリスで副がフランスで、これらが重なって一つのヨーロッパシステムが作られていると言えるのではないか。陸か海かというよりも、ヨーロッパの中で異なるベクトルが同時的にでてきて相補っている、という点が重要ではないか。それが東南アジアとの関りにも微妙に違った影響を与えているのではないか。

木村雅昭　付け加えると、国家史の中ではイギリスが百年戦争で大陸から追い払われて、そこで海洋国家として大陸国家とは違う発展を遂げていくんだという点をドイツのオットー・ヒンツェという比較史家が強調している。意外と産業革命の前にその転機があ

ったとも考えられる。それに対してまさに大陸諸国は陸軍力に力を注いだ。近世初頭まではヨーロッパはだいたい同じような封建国家としてゆるやかな連合を形成していたが、１５世紀あたりから分かれていったのではないか。

松原正毅　川勝さんの立場から土地所有のことをおっしゃられたが、日本は豊かな世界に入らないのか？

川勝　日本では土地所有は実態としては見られたが、概念としては地租改正まで持っていなかったとみてよいのではないか。

松原　武士の発生というところで一所懸命というのが大きなモチベーションになっている。一所懸命の背後には土地の所有の問題があるのでは。

川勝　一所懸命というのは東日本、つまり貧しい所であった。そこから起こってきて、どうなったかというと、一所懸命で在地領主になって、やがて戦国大名になっていく。最後は一所から離れ、兵農分離で土地から切り離され、城下町に集住した。近世日本には土地から切り離される唯一の支配者階級が生まれた。明治の地租改正の時、武士階級の９割が土地を持っていなかった。一所懸命から始まったのだが、兵農分離で、土地所有から切り離されたのだ。結局彼らは何を持っていたか？　何が財を産むのかというと人であり、人材登用であった。人間、人的資源、経営的資源であったと思われる。だから、所領を積んだのでも、資本を積んだのでもなく、人徳を積むことが課題とされたのだ。

松原　歴史的展開とは別に、豊かさの規定の問題があろう。東日本が貧しいと言いはじめたら、世界の中でさて豊かなところはどこになるだろうか？縄文からの歴史系列から見た場合に、日本はものすごく豊かな世界であったのではないだろうか。東日本もふくめて。線をひくことは非常に難しいが、東日本を貧しいと規定すると、貧しいところがかなり多くなってしまう。

川勝　ご指摘のとおり、縄文の狩猟採集生活は立派であったと思われる。農業が入ってきた時、農業的観点からすると、東日本は西日本に対して辺境になってしまった。つまり農業生産力は低く、そこで土地からあがる物を換金する動きがでてくる。財を産む土地を領地としてしっかり経営するというのが武士の最初の姿だったと考えられる。武士が最終的になぜ所領経営から離れたのか、あるいは土地所有から自由になったのかという点は非常に興味深い。

松原　公という概念の問題もからんでくる。

川勝　ヨーロッパの場合、資本家と生産者が分離していく。資本家が土地を所有して、無産者と有産者に分かれた。これを本源的蓄積

という。他方、日本では生産者、これは土地を持っているが、これと経営者が分かれる。江戸時代に経営と生産が分離したと言える。ヨーロッパでは資本と生産とが分離した。これだけがこれまでは経済発展の唯一の条件であるといわれてきた。しかし、ヨーロッパ以外にも世界には資本と土地を持っている層はたくさん存在している。にもかかわらず、資本主義が起こらなかった。むしろ、たまたまヨーロッパでは土地所有者が同時に経営を行ったところこそ重要だ。所有と経営が一体となっていたわけだ。ただし重要なポイントは経営である。所有なしに経営を行っている人たちが実は近世日本にいた。それは経営と生産とが分離していたからである。武士が経世済民という経済行為と経済政策を行い、そして藩全体を富ましていき、これが明治維新に繋がっていった。経営者は自らのために資本を蓄積しない。角山さんの言葉を借りれば、徳を蓄積していたのである。だから、尊敬される。経営を任される。このように経営と生産の分離が世界で最初に日本で起こった。所有と経営の分離をコンセプト化したのはヨーロッパでは２０世紀に入ってからであった。シュンペターの経済発展の理論にあるように企業者活動と所有とは別であり、企業と資本家とは別であるということであった。『資本論』の英訳では本源的蓄積を primitive accumulation というように primitive という用語を使っている。そこには野蛮という意味合いがある。土地を暴力的に奪ったから、原始的だ。農民から土地を奪うとか、あるいはアフリカやアメリカで土地を奪うとかいかにも野蛮だ。これに対して、経営と生産の分離を、primary accumulaion、第一の、本来的な蓄積であると言いたい。両方それぞれあい並ぶと見たほうが良いと考えている。しかし、primary accumulaion を行わなければならないほど、日本も海からの外圧が強かったと見ている。

渡辺 primitive accumulation の primitive にあまり感情移入するとやや問題かもしれない。マルクスが積極的に使ったが、そもそもスミスが最初に言ったものである。しかし、スミスは previous accumulation、すなわち先行的蓄積という言葉を使っていた。これをマルクスがドイツ語で本源的という言葉に置き換え、これが英語に訳されて primitive となった。ここでいう primitive のもともとの意味を遡れば previous の意味とほぼ同義であると考えておいたほうがよさそうである。資本蓄積の前提条件を作り出す過程というほどの意味である。むしろ、マルクスがなぜ previous に相当するドイツ語の vorhergehend ではなく、ursprünglich というおどろおどろしいドイツ語を訳語とし

たのか、という方が問題であろう。この点については小林昇先生がかなり執拗に学説史的に分析している。

川勝　『国富論』でprevious という言葉が使われるのは、previous to ~'s accumulation という形であった。しかも使われているのは５本の指で数えるほどである。マルクスは、土地を持つ者と持たない者とに分かれることが、絶対に大事だと信じていた。しかし、私はこれが誤解であったと思っている。つまり、ドイツやフランスでは起こったかも知れないが、イギリスでは始めから個人的に土地を持っていた。土地の私的所有制がイギリスにはあった。それを共同体的土地所有から個人資本家の私的所有に集中する形になったとマルクスは読み込んだのではなかろうか。

角山榮　中世イギリスの農奴に土地の私的所有権があったとはいえない。ただし、土地の所有権が比較的早く確立したと言うことはできるであろう。

陣内秀信　都市の側から土地の問題を扱っていますと、例えば日本の場合は、近世の資料について言えば、城下町に関する地籍、地割の資料がかなり多い。土地の資料をこれだけ残した国はめずらしいのではないか。ですから、建築の側から都市史をやる人達は地面の資料を使っており、上物の資料はほとんどない。町並みを調べても近世の建物は必ずしも残っていない。ですから土地から再構成して都市形成史を行っている。江戸の場合も、私有制に近い実態もあった。ヨーロッパの場合は例えばイタリアにしても、地籍の資料というのはそんなに系統的にはない。ナポレオンが征服して１８世紀の終わりにようやく系統的に近代的な地籍、土地の資料ができる。市街地の場合は土地ではなくて上物、建物と一緒であった。ですから、不動産価値というのは建物の方が優勢という意識もあった。無論、農地とか、田園では土地ですが。ともかく市街地においては土地と建物が一体であった。例えば、フランスが、ダマスカス、アレッポ、カイロなどイスラーム圏を統治していた時代、１９３０年代に５００分の１の詳しい不動産の地図を作っている。これは全部建物が記載されていて、噴水とか中庭にある樹木もカウントされている。また、壁がどちらのファミリーに帰属しているかまでしっかり記載してある。だから、建物が重要である。それと、現在でも日本と比べると、ヨーロッパの大陸の国は公的所有の土地が大変広い。例えば、イタリアだとカトリックが持っていた修道院の多くを国家権力が取り上げてしまった。それを役所や大学にしている。北欧にいくとかなりが公的所有の土地になっていて、その点でも必ずしも土地が私的所有だけではないと言えそうである。イギリス

の場合、フランスや大陸の場合とどこが共通していて、どこが違っているのかと言うことをもっと知りたいところである。

渡辺　ドイツの自治体の所有は大変大きい。だから、自治体が主になって住宅政策を展開できる。

陣内　東南アジアについてだが、インドネシアを調査していた東洋大学の建築の人達が、カンポンとかが多かったので中心部ではなかったかもしれないが、土地の資料がほとんど見つからないので、厳密に空間を把握するのが難しいとしきりに言っていた。それは、豊かさがあって必ずしも土地にこだわらない、地籍などそんなに管理しなくてもよかったのかもしれない。環境・空間を管理しようとする発想も公的権力が強くなければできない。地域によって随分異なる。